
ロスト・セーブ

空丘夕葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロスト・セーブ

【Nコード】

N1288Z

【作者名】

空丘夕葵

【あらすじ】

一部の科学技術が急激な進歩により、遺物化してしまった前世代のPCや携帯電話、その他周辺機器。その遺物や廃棄物を取り扱って管理する場所がある、それが《第三廃棄物管理所》である。そこは誰も寄り付かない場所だ、それも当然の話である。だがそこには一人の高い潜在能力と身体能力を持った少年がいる。五年前《Photo Electron Sensor System》が発売され、それを搭載した供給率一〇〇%の一般的電子機器が発売されたが、少年には扱えない。そんな中学校の入学式を終えた少年、現

在は第三廃棄物管理所長兼揉め事処理屋として生活しているのだっ
た。

人間、鬼姫、女神、鬼神。

人間にして鬼の姫は神となり人を喰らう、鬼姫神——またの名を《鬼秘神》という。

鬼秘神と漆黒い妖精——空想と幻想とちよっぴり現実の饗宴。

境界線と臨界点、許容量と限界超過、理性と本能、意識と無意識、虚無の烽火でいざ開宴。

漆黒の少年には通り名がいくつもある、すぐに思い当たるものでも四つは確実にある。

少年の家族構成は両親と少年、双子の妹と一つ下の弟、妹は生まれた直後に死んだと聞かされた。一つ下の弟はしっかり者で何でもござれである、そして少年は料理の腕と異常なまでに高い身体能力、ある一部の人から見れば実験体サンプルになって君を調べさせてはくれないか、と強請って来るようなことさえ有り得るであろうこの身体。

少年と呼ぶにはあまりにも少女に近い風貌、体軀をしている少年だ。身体能力が高いというのにも関わらずな痩せ型の少女体形、こんな少年のどこに身体能力の高いところが有るのだらうと疑問に思うのが常だ。普通の人間からしたら異状、だがしかしながらこの少年には通常なのだ。つまりそれは少年が光速の領域を超えたスピードで行動が出来るであるとか、不老不死であるとかだ

この世界は真っ黒だということを少年は七歳の頃から知っている。これは文字通りの意味で情報ある者が果てしなく勝者なのだ、そういう裏の世界が少年にとっては居場所だ。弟には話してないから知らないと思う、正直知られて欲しくはない部分だ。弟には無知のまままでいて欲しいと思う反面、それは無理だろうと高をくくっている自分もあることに少年は気付いている。

日が沈み切って間もない一九時一二分、今回のミッションはとある殺人犯グループの抹殺。殺人グループの目的は内閣総理大臣の排除――つまり殺すことだ。命を狙われた総理は自分の命欲しさに、どこで噂を聞きつけたのかは知らないが少年を雇ったのだ。つまり反抗勢力を排除しろとのことなのだろう、そして今は敵の本拠地である建物に潜伏している。

――おい、準備は出来たか野郎共。そろそろ時間だ、準備が出来た者から先に発て。

グループのリーダーらしき巨漢な人物はそう指示すると、ジャケットのフードを頭に被せサングラスをして、マスクで口元を覆う。まだ外には誰も出ていない、今しかチャンスはない、少年は単独でしか動いていない。故に少年の戦友はここにいない、一人で五十もの暗殺者を殺すのだ、生半可な実力ではない。

少年の腰のホルスターに収められたカスタムの拳銃。

少年は二挺のシングルアクションの拳銃をホルスターから引き抜くと、扉を開けて入りトリガーを引いてまずは扉付近のターゲットを二人を打ち抜き射殺。続けざまに左右それぞれ六連射ずつ発砲、あつという間にターゲットは十二人の死亡者が増える、累計十四人死亡――残りはあと三十六人。圧力弾によって弾切れは発生しない、何故ならば空気に超高压を掛け発砲しているからだ、実弾とほぼ同じ威力を持っているので殺傷力の心配はない。

さすがの暗殺者も馬鹿ではない、少年の四方八方を取り囲む。だが少年にしたらそれは願ったり叶ったりだ、メンバー全員が少年に気を取られているということは半ばミッションを達成し易くなったも同然だからだ。

少年はほくそ笑んで接近してくるターゲットの額を打ち抜いていく、ここで残り三十六人から残り二人へと激減。残る二人はリーダーとその側近、サブリーダーといったところか。

「よう、奇襲とは派手にやってくれたな、お嬢ちゃん。この落とし前はどうやって付けてくれんのかな？」

「……………」

「黙ってないで何とかいったらどうなんだ。この娘だんまりを決め込むつもりなのかな、リーダー」

それでも少年は動かず何も喋らず、ただひたすらにターゲットの出方を窺う。

それがリーダーの癪に触ったのかは少年の知ったことではないが、衝動を内に秘めたような声音で「そっちがそのつもりなら、こっちもそれなりの持て成しをするまでだ」と言う。

「それもそうだね、実際こっちの戦力はリーダーの君と僕しかないなくなっちゃった訳だし」

「まあ……もうそこで死んでる奴のことは何も考えてないが、計画を邪魔した罰は受けてもらうぜ、お嬢ちゃん——っ！」

巨漢の拳を放って来るが少年には当たらず空を切る。巨漢のリーダーは当たると確信しているほんの数ミリという近距離で少年は避けたのだ、しかもそれだけではなくその者の背後に回っている。リーダーである巨漢の男が気付いたときにはもう遅かった、油断も多少は有っただろうが、最早そんな次元の話じゃない。

サブリーダーであろう優男にすぐさま照準を合わせる、優男の表情は何が起こったのか把握出来ない感じで少年にはそれほど関係なかったが、優男はみるみる内に蒼白になり何かに思い至ったのか「まさか、君は……」と嘆きにも似たような声で呟く。

「——ブ、ブラッ」

「————っ！」

少年は優男が言い終える前に超高压の空気弾が額にクリーンヒット、少年は何事もなかったように踵を返し、そのまま夜の町に消えていった————。

近未来、世界に取り残されたモノの廃虚がそこにはあった。

そこには誰も寄り付こうともしない、当たり前だ、建物もその中にある物も全て廃虚なのだから。なのだけれど、何故かそこには一人の少女がいる、いや残念ながら少年だった。

そこには壊れた電子機器や錆びれ付いた車両、罅割れたコンクリートや硝子などの数々。中には使えそうなのも多数存在するが、現在の世界ではほとんど役に立たないだろう、だってこれらは廃棄物なのだから。少年がこんな所に来たのは、そんな廃棄物を廃棄じゃなくさせることくらいだ、電子機器に限りだが。

世界にはもう旧式のディスプレイもキーボードもない、いや、使う人はもう居なくなってしまったというのが正しい。現在は科学技術も発達し、光電子でホロウィンドウとホロキーボードを発生させる技術も今や一般的だ。

小型の携帯端末^{デバイス}で復元できる所まで来たのは五年前の夏季頃、今は少女のような服装の少年も七歳と若かった。

今はその《Photograph》Electron(E) Sensor(S) Computer(C)のピーセックと《Photograph》Electron(E) Sensor(S) Device(D)のピーセッドは無くってはならないモノになっているのは言うまでもないことだ。存外、人間という生き物は少なからず新しい物に食いつく物だ、というより社会がそう言う仕組みになっている。まあ少年も使えるものなら使ってみたい物だが、それは叶わない夢だと既に諦めている。

だからと言っては何だが、少年は旧式のアプリ制携帯用デバイスにヘッドフォンを無線で繋いで楽曲などの音源をひたすら聴いている。少年にとっては聴いていると言うよりは何も考えずただ聴き流す、という方が近いのかも知れない。

「まあ。取り残されたモノとしては、そんなことは関係ないんだけどな。お、良いの発見」

何てことを呟いてみたりする、返事は当然ながらあるわけがない、だってこの場所に近付く者は少年以外ないんだから。いや、近付く必要がないというのが妥当だろう、整理などは人件費の削減で機械に任せっ切りにしていることがほとんどで、立ち寄る必要がない。

少年の今いる第三廃棄物管理所は全てを機械任せにしない、前時代の遺物だ。つまり手作業の管理所なのだ、それにしても建物の中にも外にも廃棄物やそれに準ずる物がある。それは廃墟なのだからだろうか。

「今日のうちに運び込まれたのはもう大体は見終わったな……今回はあまり使えそうなのは無かったし、そろそろ家に戻るか」

廃棄物管理所の管理室から出て、扉のセキュリティーのロックを掛ける、と言っても一応電気は流れてきているので電子ロックは掛けられる。

こんなことは小学生であり、世界に取り残された少年に唯一できることで、そのことは誰にでもできることだ。正確に言えば小学生でもないのだが、日本や世界には教育の義務と言うものが存在している所為で、小学生という肩書きが少年にはあるのだ。

「こんな所にいるなんて物好きだよね、キミも」

こんな廃棄場みたいな所には相応しくなさそうなゴシックな服装で、その男の子は同い年くらいでありながら、電子機器製造量販会社の社長をやっているのだから驚きだ、名前を都町白鴉つまちしらえという。

「そんな僕に興味を持っているアンタこそ、僕は物好きだと思うけど」

「いやいや、上からの命はもう終わってるのに、ココに拘ることが」「僕には力がないんで、こんなことでしか自分を癒せないんだ。それがどんなに惨めでも、それしか出来ないんで」

「こんなガラクタ同然の金にもならないものを引き取ってどうするつもり何だか、俺には見当もつかないぜ」

理解できないと言った表情で、廊下に設けられた自動販売機にピーセッドを翳して電子マネーを納入する。

「ガラクタじゃないよ、ちゃんと使えるし。政府があんなことをしなければ今でも使っていたかも知れない物ばかり、未使用で棄^さてることになるのもザラだし……って、これは知ってるか、実際に電子機器を取り扱ってるんだから」

「そうだな、確かに今はPES関連の電子機器が群を抜いてる……」
「それに僕はPESを使えない、それはアナタも知ってるはずじゃないか白鴉。だから僕は機関に追放されているし、それに対抗する力も持ち合わせてはいない、持っているのはこの廃棄物管理場だけだ」

「知ってるよ、アレだろう……確か症候群の類の詳しくは憶えていないけど、この世の中では死活問題の症状なのは憶えているよ。だからと言って機関がキミを捨てるとは思えないな、捨てるならいつそキミを始末するだろう？」

「追放はされても逃がさないってことなんだよ、きっと。僕は逃げられると思っていないし、逃げる気もないのにな、それに僕は始末できないんだよ」

あはは、と白鴉はちよつと苦い笑みをし、自動販売機に一つしかない炭酸飲料の缶を押して取り出す。

その炭酸飲料の缶の栓を引き上げ封を開いてから一口飲むと、白鴉は何かを思い出したのかすぐに缶を口元から離す。

「そうそう、忘れるところだった。イダチからの頼みごとで今日中に研究室まで来いとき、何でも引き取りがどうか言ってたけど」
「今日中って……もう、約十分も残されてないんだけど、カンペキ間に合わないだろ。教えるタイミングが間違ってるぞ！」

「まあまあそう言わずにさ、イダチちゃんも待ってることだし逝^いてきな」

「言われなくてもそうするよ、怒ってたら白鴉の所為だからな」
半ば……というよりほとんど諦めて白鴉をここから追い出し、研

究所のある伏見町隅の小さな研究所に向かう。

今更少年が研究所に行った所で何もできない、出来ることと言えば廃棄物を請け賜るのみだ。それが少年が唯一この世界で出来ることで、それ以外のことで少年は限りなく無力だ、いや無意味な力はあるというのが正しい。

今更使う必要のないことだ、PESが発表されていない五年以上前ならまだしも……今の少年にはもう考えても意味のないことだ。

「はあ、今は出来ることを出来るだけする、それしかないな」

深夜一時に変わる間際、第五伏見研究所。

少年はここがあまり好きではない、それは第一の理由が電子機器を扱えないからだ。電子機器系統が扱えなければ今や死活問題だ、と言っても旧式のものでは扱えるのだから。旧式の使用は今や使うことはなくなった。そう今の少年は第二次デジタルデバイドの該当者で、その該当者は他にはいないので、世間に広まることはない。

セキュリティーの掛かった自動ドアの前に立って旧式のアプリ制携帯用ディバイスを取り出し、見つかったら完全に違法なアプリを起動してここに居るであろう人物に電話する。

「遅い今何時だと思ってる深夜一時だよ、子供がうろつく時間じゃない今すぐ帰えんな、とはさすがにアンタには言えないか。まあいい、入んな話はそれからだよ」

「わかった」

自動ドアが稼動し、少年を認識してドアを開く。

迷わず地下二階のモニタリング室まで足を運んでそのドアをノックし、アナログだなど思わなくもないが小さな音を立ててロックが解除され、音をほとんど感じさせずに開く。

そこには一台のピーセックを操作して、六面の大きいホロウインドウを発生させている一人の女性がいた、それは正しくイダチこと^{ながたいゆ}永多依友だった。年は少年よりも上で成人は過ぎているが、実年齢は感じさせない。というよりも気にならない感じだ、そう——たとえ実年齢より若々しく見えたとしても。

そのホロウインドウには何かのパラメータが映し出されていて、標記されているパーセンテージが三六パーセントと表示されている。

「チッ、全然同調率がうまくいかない」

「どうかしたのか？」

「いやなに、然程気にするほどのことでもないよ、女装趣味なガキにはね。スカート穿いたからって女にはなれないよ」

「ということはそちらさんの問題か、何か問題でも起こったのか？それにだが、これは利便性を優先しているだけで大した意味はないぞ」

依友は少年の方へ回転椅子を回して振り向くと苦い表情をして、スカートの方は何事も無かったようにスルーして話し始める。

少年にとってもそれは救いだったのかも知れない。

「システムセキュリティの向上とか諸々のことをやってるのよ、だから今は研究をしてる時間とかない。元々こっちが本職なんだし気にする必要はない、というか左遷だから研究なんて私にはできないし興味もない」

「ああそうか、PESになってから大変だもんな、色々と。僕は使えないからわかる必要はないんだけど」

「利便性は向上しているけど、それと同じくらい危険性があるのも確かだからねコレは」

「まず考慮すべき点は光電子の問題、これは電子機器であれば全て当てはまるものだが、これは考慮も何もないこれ以上濃度を減らしてしまえばPESは何もできない。子供への悪影響はまずほとんどないが、身体の電子パルスとの同調で扱うPESはクラッキングされたときの被害は甚大なものと為り得る、だからファイアウォールなどのコンテンツをダウンロードもしくは強化しておく必要がある。とここまでする一般常識の範疇だったな、まあクラッキングに遭わない限りには大変便利なツールだと僕は思っているが」

「そう、クラッキングを受けなければ、非常に便利なツールなのは誰もが知っている。だからこそ遭ったときのことを考えて予防する、

そしてその先をほとんど考えない」

依友はそう言うとか何か飲む、とジュエスチャーしてくるので少年は首を縦に振る。

すると依友は半透明のホロウインドウとホロキーボードが一瞬にして消けてPESをシャットダウンする。現代のシャットダウンにはタイムラグはない、というよりも人間には認識することは出来ないくらいだ。

お茶の入ったコップを手渡した依友は、軽量に設計された小型のペットボトルを自分のデスクから掴み取って、少しばかり残っていたコーヒーを飲み干すとゴミ箱へと投げ捨てるモーションに移行する。かと思いきや、いきなり投げる向きを交換して少年の方へと向かってペットボトルが飛んでくるが、それを少年は間一髪で受け止める。

「チッ、まあいい。そのペットボトル捨てといて」

「明らかに今の狙ってただろ、と言うより舌打ちを堂々とするなよ。まだあの時のことを根に持ってるのか？ もう終わったことだろ」

「そんなことはない、思いつき上がりも度が過ぎると気持ち悪いだけ、止めて欲しいわ。それに私はあの時の選択を認めたつもりもないし、今でも納得するつもりはないよ」

「やっぱり根に持ってるんじゃないか……」

少年は呆れて言葉も出てこなくなつて、軽く溜め息を吐く。

「私はな、お前に失望したんだよ、有栖」

「苗字で呼ばないでくれて言ってるだろ、止めてくれ」

「フン、変に気にしてる方が悪いのよ、苗字で呼ぶのは別に変じゃないからね」

そう言われると確かにそうだが、それはそれこれはこれの適用内だ。有栖と呼ばれた少年はコップのお茶を少しだけ飲んで、臨戦態勢に入る。

それを見計らったのか、依友は顔色一つ変えずに少年の先手を執った。

「良いんじゃない可愛い苗字で、男の子にしたら可愛い顔立ちとかしてるし、メイクアップしたら化けるのは実証済だから安心していいわよ、有栖ちゃん」

「ふざけるな、僕の名は胤だ。おかげで変な名前だけだな」

「初めてフルネームを名乗られたときは、苗字だけかと思ったけどね」

そう言うとき依友は堪えていた笑いを解き放ち、あはははは、と盛大に目に涙まで浮かべて笑う。一頻り大笑いしたあと、急に依友の顔が真面目になる。

少年——有栖胤^{ありすいん}はそれを見て少々身構えてしまい、コップの中身のお茶が少しだけ零れてしまう。

「今日はもうここで寝て行きなさい、明日の朝にやってもらうことを言うから」

「わかった……それより化粧が割れて化け物みたくなってるぞ」

「本物の化け物には言われたくない言葉よね、ソレ」

「僕は化け物か！」

依友はアラ、違うの？　と言った表情をするが、頬に刻まれている（ように見える）傷痕に目が行ってしまうのは仕方のないことだ。「それはそれで心外だ」と言いつて胤はモニタリング室から退室する。通路奥の休寝室とPESプレートに標記されている部屋へ入ると、そこには低反発素材の寝具が複数設置されている。ただそれだけの簡素な部屋だ。実に気持ち良さそうなベッドなものだ、眠気はまだ無いのだが早く寝てしまいたい気分になるのを抑え、スカート下の腰のホルスターにしまっている改良拳銃を取り出す。

これは胤が持っている唯一のというのは過言だが、常備している防衛用アイテムの一つだ。今日はこれの改造をするのだ、この銃は射程は一四、五メートルから二五、六メートルが限界だろう。撃てる弾は麻痺弾^{スタンガン}と目暗まし程度の殺傷力ゼロなエネルギー弾、それから圧力弾と実弾……も使えないことはないし、他にもカスタマイズを変えれば違うこともできると思う。ただし、圧力弾の弾は特殊で

新たに専用の銃を拵えるはめになったが（水の圧力弾などを放つた
め）、今では四挺の拳銃を所持している。

「僕って結構な犯罪者だな、見つからないようにしないと」

それで今日の改造というのはフォルムに関してのことで、今日は
新しい特注フォルムを無料で調達して来てたが故だ。

そんな訳で銃の外装を取り換えを行う。大きさはほとんど変わら
ないのだが、今回のモノは格好良いフォルムと言うよりも、厳つい
フォルムと言った方が合っているのかも知れない……だが敢えて言
おう、カッコイイと。ただここで勘違いされたくないことは、イン
はガンマニアやオタクじゃないってことだ。

黒銀一色のオートガンの拳銃に二挺それぞれ違うフォルムを組み
立て終わると、試し撃ち（弾丸はもちろん無し）をする。トリガー
を引くと、遊底が自動に前後にスライドしカチャと音を立てる。う
む、動作も至って良好で文句のない仕上りと言える。

「やっぱり黒系統の色はじっくり来る、銀や白だと何か違う気がする
るんだよね……」

あとはシステムの微調整くらいだけど、今日はもうさすがにきつ
いので諦める。明日のことも考慮して、ベッドに寝転がる。

現在の時刻は午前二時になるうかという頃だ。ここは大人しく仮
眠を執るのが吉だろう、そう思いリモコンで部屋の明りを切った。

そして翌日の朝。正直な話しあれから約五時間後（午前七時前後）
と言った方が正しい。

白を基調としたどこか大部屋の病室めいた光景が、照明を点ける
と目に映る。ベッドから降りると、出しっ放しの二挺の拳銃を腰の
ホルスターに入れる。職員でもない胤の朝食なんて気前の良い物は
ここには存在しない、ある物と言えば空気とお手洗いの水道水だけ
だ。

「さすがに昨日の夕方くらいから何も摂ってないから、お腹が空い
たな」

お腹辺りを摩りながら溜め息を吐いて呟く。

そんなことよりさつきから外が騒がしくて少々イラツとくるのを我慢して、その騒がしさの元凶の場所まで行く。その場所はどうと職員用の食堂だった、胤のお腹の虫が今にも大暴れしそうな場所だ。

「お姉ちゃんの意地悪！ 何で起こしてくれなかったの、酷いよ」

「あのねえ、アイツは止めといた方が良いでしょう、特に千遙……アンタはね。それに仕事のことで呼んだだけ、ただの小学生——いやもう中学生か、の口出しは殆ど無意味よ」

「それはイン君も同じだよっ！」

「同じじゃない。アイツはもう小学生でも、ましてや中学生でもない。もうそんな生温い人間じゃない、むしろ冷徹……いや冷酷な奴だってことを私はアンタ以上に知ってる。嘘は言ってないよ、あとお願いだからもうアイツには近付かないで。じゃ、もう戻るから」

何だこの状況、凄く出辛い雰囲気醸し出しちゃってるんだけど。あ、依友がこっちに来る、隠れないかと思っても、こんな所に隠れるとこなんてあるわけがない。そこまで思考を終えた時点で、時はもう既に遅かった。

依友は「——っ！」と言葉にならない声を発し、目を見開いて驚くとすぐにいつも通りに戻して胤の方へと来る。

「嫌な趣味をお持ちだね、いや今に始まったことじゃないか」

依友は立ち止まって胤の服装を流し見する。

「いいのか妹をあのままにしといて」

「良いのよ、どうせ今のあの子には私の言葉は届かないし。勝手にさせるしかないでしょ、あと妹に手を出さないでよ」

「僕が出て行っても満足はしなさそうだけど？」

フン、とそっぽ向いて依友はモニタリング室へ戻っていくので胤も付いていく。モニタリング室へ入ると今は前には置いて無かった、旧式の電子機器などが山のようになっている。

「これでここの処理物は終わりだから、もう当分会うこともないな」
「言ってくれるなあ、でも僕もこれっきりにするから、こんな感じ

では会えなくなるな。と言うよりも、これからは僕から会わないようにするから。えっとじゃあ、これ全部で六万八千円って所かな」
「オイ、それってまさか……」

上からの命令かどうかを訊いているのだろう、鋭い奴だよまったく依友は。まあ胤という人物の関係者ならわかって当然のことでもある。

依友は財布から現金十万円を取り出して渡してくる。

「餞別だからお釣はいらないわよ」

「わかった、それならありがたく貰っとく。じゃあ後で業者を呼んでおくから、僕はもう帰るよ」と言って胤は研究所から立ち去る。依友は何も言うこともなく椅子に座り、一呼吸置いてから仕事を始めていた。

依友と別れてから数分後、胤は帰路に就いていた。家まで後半分くらいに差し掛かった辺りで人込みはない、というよりここは普段使われていない場所だから人が通るわけがない、ただ一人を除いて目の前から胤より少し高めの背丈をした学制服を着た少年が走り寄ってくる。

「あ、兄さんやっと思つた……今日は学校があるから早く帰って来てって言ったよね、ボク」

「すまん、大河。急な用事が入って、連絡するの忘れてたわ」

「今日何の日か知ってる？ 兄さんの入学式だよ、初日からこんなことでどうするの、もうしっかりしてよ」

「あー、そういえば……今日入学式だったかもな。じゃあ着替えないな、さすがにこの服装じゃダメだと思うし」

「当たり前だよ兄さん——っ！」とツツコミを入れてくるこの少年は、胤の弟で名は有栖大河ありすたいがと言う。プチ情報として一年違いの同じ誕生日である（さすがに時間までは違うが）。

今日が入学式だということを素で忘れていた胤は、今日が始業式で晴れて小学六年生になる大河に、説教じみた態度をしてきたという構図だ。しっかりしている人はなんぞや、と問われたら真っ先に

大河と胤は答えるだろう。

即行で家に帰ると、中学校の制服を身に纏う。男子生徒は学ラン、女子生徒はセーラー服という決まりは少し前に廃止されている学校だ、一応男子生徒がセーラー服にスカートという元女子生徒用の服装も今日から通う中学校は許されている。元々は女子生徒が学ランを着たいという要望が在ったからで、ならいっそのこと男子生徒もセーラー服を解禁した方が公平と言うことで現在こういう形に治まっている。

男子生徒にとっては非常にメリットのないルールだ。だって男子生徒がセーラー服（ズボンとスカートが選択出来るのだが、特にスカート）の場合、恥ずかしいことこの上ない、つまり悪趣味な罰ゲームもしくは虐めに遭っている様なものだと言わざるを得ない。

そのセーラー服（スカート）に胤が着替え終わると、アラートクロックは午前七時四十分を示していた。しっかりと腰の所に巻き付けているホルスターに拳銃を二挺滞納する。呼びに来た大河はそれを見ていないので、兄さんは何でそうゆう人種になってしまったんだ、と無意味に打ち拉がれていた。

大河が用意して置いてくれた鞆を持って玄関へ行くと、大河が「遅いよ」と言っ先へ出る。

「兄さん、初日から遅刻なんてなったら許さないから。覚悟しててね」

大河がいつもよりドスを利かせて言う。それが久々な感じだっただけに胤は少しだけたじろいでしまう。

そんなこんなで、胤が自転車の座席に座り込むと後ろの荷台には大河が座る、行きは下り坂なので楽に進める。大河が通っている小学校は下り坂の途中に面しているので、あまり苦にはならないのだ。下り坂の中程まで来ると大河が胤の右肩を叩く、これはもう降ろしての合図だ。

速やかに胤は自転車を道路の端に停車させる。

「まだ学校まで少し距離あるけどここで良いのか？」

「うん、ココで良い。さ、早く学校へ行って、ただでさえ遅れそうなんだから」

大河はそう言って本心の【兄さんと一緒になんてただでさえ恥ずかしいのに、こんな格好している兄さんは無理だ】とは絶対に言えないので、兄さんを笑顔でそつと見送ることしか出来ない。その葛藤を知ってか知らずか、兄さんはそのまま自転車で下り坂を走り抜けていく。

大河と別れてから中学校の敷地内に入ったのは、あれから十数分経ってのことだ。自転車を学年別の駐輪場に停めて、玄関口に拵えであるクラス分け一覧表を眺める。胤のクラスは二組の三番。今年は二組も在るのか、と胤は少し驚く。それも無理からぬことだ、去年や一昨年は一クラスで、ここの所は一組三十人の所を十人に分けてクラスを三組程度にするのがここの界限での通例だったはずだ。

それがこの学校では違うのだ、三十人弱という一般的な振り分けで二組もあるからである。まあそれはさておきだ、予令が鳴ったので急いで二組に向かう。

教室へ入ると適当に設えられた席に座り、机脇の掛けノブに鞆を掛ける。さつきから男子生徒の視線が少しばかり多いのは気のせいではあるまい、辺りを見渡すと男子生徒の二、三人には絶対に目が合うのだ。

スカートのポケットに入れている旧式のアプリ制携帯用デバイスを取り出して文書アプリを起動し、ネットで落したWEB小説を読む。ただこれはあまり喜ばれる行為では無い、むしろ妬まれるぐらいだ。まあ単純に買えば良い話しなのだが、書籍化した小説のWEB版というのは稀少価値が高かったりする。その中で気に入った物だけを買っても罰は当らまい。

すると隣人から声が掛けられ、胤はデバイスのディスプレイから目を離して、少しばかり声の主の方へ顔を向け「何か用？」とだけ対応する。

「今時旧式を使ってるのを見から、何でなのかなって思ってたさ」

「ん？ ああ、コレのこと。手慰みにしかない、ただのオモチャだよ。今は何だってP E Sだから」

胤はそう言うが違法アプリ満載のそのデバイスには、電話・インターネット・メール・クラッキングなどのアプリが完備されているのにも関わらず、何処が手慰み程度な物か、と自分自身心の中で思ってしまう。

だがそんなことを男子生徒のコイツは知る由もないのだが。

「ま、それもそうか。でもそれって依存症的な何か？　――って、俺はこんなことを言いたいんじゃないんだ。えっとさ、君……可愛いから気を付けた方が良くよ、さっきから男子がこっちばかり見てるし。じゃあ俺はこの辺で」

言いたい放題言うところの男子生徒は自身の席へ戻っていく、ちなみに今は中央の列の最後尾だ。

「……何だったんだアイツは」と不思議に思いながらインは呟く。すると担任の教師だと思われる男性が静に入ってくる。教卓まで歩き制止すると「着席して私語を止めろ」と軽く芯のある声で言い、コホンとわざと咳払いをし後へ繋げる。

「今日は入学式の後に部活動の紹介があるから、興味のある者は参加すると良い。まあ原則的に部活動の強制が無いので、各々の判断に任せる。あと関係ないとは思いますが最近はまだ麻薬問題が浮上し来ている、くれぐれも登下校などは注意するように、以上」

担任教師はそう言う教室から出ていく。

生徒たちはまた各々の好きなように友達とわいわいがやがやと戯れている。

そんな中一人で誰とも関わろうともしない胤は、間違いなくハブられキャラの道を歩んでいると言って良いだろう。だがしかしそんなことは胤からすると杞憂なことだ、こっちでの人脈があるうがあるまいが、さして興味がなかったからだ。それに胤から友達を求めるなんてことはまず有り得ない。

胤が一人で何もしないで居るのが気になったのか女子生徒の二、

三人が話し掛けてくる。

最初は「ねえ、どこの小学だったの？」と中央の女子生徒。

次に「名前は何て言うの？」と右隣の女子生徒。

最後に「……………」と左隣の黙視してくるだけの女子生徒。

「僕は一応紘渡小の出身で、名前は……有栖、胤」

「ありすいん？ 変わった苗字だね。私は二伊野小出身で来瀬夏希くるせなつきよろしくね——ありすいんちゃん」

「おお、ボクっ娘だあ。あつ、あたしは足枷自由あしかせみゆね。庄賀茂小出身だよ、よろしく……それと——」

「同じく庄賀茂小、高梁夜宵……よろしく、です」と言うと、高梁夜宵はインの耳許まで近寄って来ると「あと有栖くん否定は明確にしないと、後々面倒なことになります、よ」と囁いて、すぐに来瀬夏希の隣りまで戻る。何と凄まじい連携プレイなんだ、と言うよりも、初見で胤のことを察知していることに正直驚くしか出来ない。

「僕は男だ……それに名前は有栖が苗字、胤が名前。高梁さんはわかっていたみたいだが」

「「えええ、全っ然見えない」」

来瀬夏希と足枷自由はそう言うと、胤の身体を少しの間凝視して髪の毛を触ったり、素肌を摩って来たりする。

高梁夜宵に助けを求めたが、私にはどうすることも出来ない、と言った感じだった。

「なにこの黒髪、サラサラしてる」とか「お肌もスベスベ、羨ましい」などと宣ってくる、失礼な輩たちだ。一頻り触り終わると満足したのか「良いものをお持ちで」「ごっちゃんです」と言って、二人は高梁夜宵の隣りへと戻る。

これでも一応髪を切った方なだけだな、と思いながら肩にギリギリ掛からない程度の黒髪に触れる。最高到達点は腹部辺りをだっ
た気がする、その時はさすがに髪の毛が邪魔をするので切った……と、これは一年前の話だ。

「あ、そう言えば部活動何にするか決めた？」

「いやまだ特に決めてはないけど、入るなら時間制限とか厳しくない部活かな」

「新たに作るって方法も在る、ちょうど四人いるから」

高梁夜宵の言葉を聞いて、来瀬夏希と足枷自由の両名は顔を見合わせる。

不敵な笑顔を浮かべ胤へと視線を向けて来る、嫌な予感しかない。その予感は奇しくも数秒後に現実なものとなってしまった。

【私（あたし）たちと一緒に部活を創りましょう（創ろうよ）】

「忠告しとくけど僕は忙しいから途中退席とか普通にするぞ、いつ行けなくなるかもわからないしな、それでも良いならどうぞどうぞ」

「それでも良いよ」「おうよ、ダチコウ（笑）」「構わない」

何故か三人共容認してくれたみたいだ、と言うよりも自由の言ったダチコウって単語を、いまどき遣う奴なんて少ないと思う、これは稀少価値が高そうだ。

「ありがとう。それでさ、悪いんだけど今日は用事があるから、明日にでも何するか考えて来るってことにしないか？」

すると三人は顔を見合せて向き直り、またもや肯定してくれる。

何て良い奴等なんだろう、とこのとき胤は初めて思った。でもなんなのだろうかこの違和感、ただこういった状況に慣れていないだけか、とすぐに思い直す。

「私たちも今日は予定がありますし、気にしなくても良いですよ」

「そうそう、塾が始まるんだよ。ああ、地獄だ」

「自由はちゃんと真面目に講義を聞いた方が良い、それで出される課題も多少は減ると思う」

夜宵の的確な指摘に自由は「うへー、それだけは勘弁して欲しいな」とテンションがだだ下がりしながら言う。

すると突然に教室に効果音が鳴り、アナウンスが流れる。

『男女に分かれた後、体育館のレクリエーションルームにて待機してください……全新生が揃い準備が完了次第入学式を開始します。尚、案内には各担任が向かうので少々お待ちください、その後は担

任の教諭の指示に従って行動してください』

アナウンスが流れ終え、数分後には担任教師が教室へ来て指示通り移動を開始した。

レクリエーションルームには約六十人もの新入生が待っている、教師達は通信機で連絡を取り合っている。もうそろそろなのだろう、担任教師は閉じていたレクリエーションルームの扉を開放し、新入生の一組を第一体育室の扉の前で入場準備させる。そしてレクリエーションルームから一組が出て行くと、二組も出席番号順に一列で整列し一組の後に付いていく。さながら大名行列のようだな、と思ってしまう感じだ、規模は小さいものだけれど。

けたたましい行進曲のサウンドと共に一組の教師が先陣を切る。それに続けとばかりに一組の新入生徒達は入場していく。

後列の折り畳み式の座椅子には二、三年生が座っており、前列の左斜め前には御来賓の方々と右斜め前に教職員勢、そしてその両脇には保護者の皆様が腰を下ろしている。左側に二年生、右側には三年生の間の通路を通り、前列の左側が一組の生徒で埋まっていく。またそれに続くように二組も担任教師を筆頭に一組に続いて反対側の折り畳み式座椅子に腰を掛けていく。

—————こうして面倒な入学式は始まったのだった。

何事もなく入学式が終わると新入生はそのまま教室に戻り、帰りのホームルームをして各自解散だ、この後に部活紹介へ行く者はこのクラスでは二十人と過半数を占めていた。

これは部活動と言う青春の汗が恋しいものばかりだからだろう、それに内申書の記入欄の問題もある、今も昔もそれほど変わらないということだろう。

放課後の現在、来瀬夏希たちと別れを告げて帰路に就いて数分ぐらい経っただろうか。いきなりディバイスの着信音が奏でられる、液晶画面を確認すると秘匿回線のような、こういった回線で掛ける相手と言うのは限られてくる。そうこの僕を棄てた政府とかが

その一つに該当する。あの時の番号は変えているにも関わらず、向こうからの連絡は掛かってくる。誰かがリークしているのかは明白で、犯人も何となくはわかっている。

胤は通話ボタンをタッチしてデイバイスを耳元まで持ってくる。

「ハロハロ、イン君コンニチハ、元気ニシテタカイ？」

「少なくともアンタより不健康な奴を僕は見たことがない、ミス天才サイエンティスト——とおのみみじ遠野椛博士」

遠野椛が変な声で話し掛けて来たので、さらっとお返しの嫌味を返す。

「それより早く来ないから怒ってたよ、まあ誰とは言わないけど」「こんなのがあのPESを開拓した奴なんて信じたくなくなるよな、いっそのこと廃止になれば良いんだ。あと今からそっちに向うから、三十分くらいあったら着くって上に伝えとけ、じゃあな」

胤が通話を閉じようとした時、遠野椛の「ちよっと待ッタ！」の声が聞こえて来て「何だよ、もう用はないだろ……」と、胤は溜め息を吐いてから怠そうに言う。いや、実際に怠いのだがそれを口にする程のことでもない。

「それがあるんだよね。お呼び出しが終わった後で良いから私のラボに来て、良いものを見せてあげるよ」

「わかったよ、行きゃあいんだろ行きゃあ。じゃあ今度こそ切るかな」

ばいにやらほいほい、という何とも言いがたい挨拶か何かをして来たが、そんなことは気にせずに通話を閉じる。

そして自転車を走らせること二十数分、目的地の表向きは電子機器製造量販会社《EXCILEイクシル》という会社に到着した。次いでに言う和白鴉が社長をしているとであり、遠野椛の勤務先でもある。名前は売れているのに、本社は小規模という不思議な会社だ。

小脇の職員用の駐車場に自転車を適当に駐輪させると、職員用の裏口エントランスホールから入社し、受付を済ませ社長室へと向かう。

すると社長室にはこの職員ではないことが明白な、中年の男性がいた。

「遅いぞ、有栖クン。もう依頼人はとっくの昔にここに着いているのだからね、君も座りたまえ。それで今回の依頼はさっきの通りで宜しいかな？　ただ一つだけ忠告させてください、揉め事処理をする上での規則があります。端的に言って依頼内容は出来るだけ希望通りの内容で遂行して行きます、ですが我々は飽くまでも物事の間で判断し、正しいと判断した結果の行動を執ります。つまりは依頼者側が裏切らない限りこちら裏切らないということです。判断は私とその子での判断で動きます」

「そう言うシステムか、依頼成功率はどのくらいなのかな？」

「そうですね……全てのことを良く知らないので大体のことしか申せませんが、九〇%の確率で解決に導くことを約束しましょう」

「そうですか、ならお願いします……報酬の方は前払いでしたね、ここに五十万円あります。どうか犯人を捕まえてください」

「お任せください、ウチの社員は優秀ですから」

営業スマイルでクライアントを帰すと胤の方へ向き直り、笑顔は跡形もなく消え去って真剣そのものな社長の面構えになっている。

「まあ、さっきの依頼内容は麻薬の所持している集団の搜索及び、警察に突き出すこと」

「ドラッグ関連か、犯人の特徴などの詳細なデータとドラッグの性質は解っているのか？」

「ドラッグの詳細なデータとアバウトな犯人の情報はクライアントから貰ってはいるよ、見てみるかい？　きつと驚くよ」

そう言って白鴉は資料を渡して来る、それには電子ドラッグの詳細な記述……いや、これは研究レポートみたいな物か。

投与者には多幸感と並々ならぬ身体能力の向上が視られる、身体能力の向上に関しては本来の身体のリミッターの著しい欠如だと思われる。興奮状態になるとオーバードライヴ状態の力制御が著しく低下し、最悪の場合死に至る。衝動的現象は殺害衝動に駆られ、そ

の際の意識状態の確保は一定の条件を満たした者のみが確立されていることが判明、以後は要研究とする。

「おい、コレ研究レポートな上にまだ途中で打ち切りにされてる。コレじゃあ参考くらいにしかないぞ、しかもアバウトな犯人情報ってのもあまり使えそうにない。こんなので本当に完遂できるのか？」

「大丈夫だ、ウチにはキミ以外にも優秀なスタッフはいる。取り敢えずはこの研究資料のソースとかもろもろ探ってみるしかないから、キミの出番はまだということになるね。キミさえ良ければ、洗うのを手伝ってくれると助かるんだがね」

「ところで僕への報酬はどのくらいあるんだ？」

「取り敢えず六くらいでどうかな、まあ今回は赤字になるがキミへの投資とするよ」

「六十万か……それだけ貰えるなら良い、引き受けよう」

インがソファから立ち上がり、ドアの近くまで行くと白鴉が最後に声を掛けてくる。

「期待しているよ、ブラックシルバー漆黒の閃光」

「ほざいてろ、僕はこんな依頼で折れたりしない。たとえ相手がどれだけ強かろうとな」と言って胤は退室すると乱暴に扉を閉める。

その後十二時十数分、胤は遠野椛に言われた通りにラボに足を運んでいた。

電子機器の数々が閃光のごとく煌いている。これはピーセックの光で、各機各色の半透明に輝いていた。そこにいる研究員は数十名に渡って働いているが、一際目立つのは低身長で不健康極まりない容貌の女性一人が確実に、悪い目立ち方をしている。その名も遠野椛という、天才の天災なる変人と揶揄される新人化学者だ。ちなみに胤とは五歳の歳の差があり、現役女子高生である。

遠野椛は胤が入室してくると「やあ、早かったね。今日は絞られなかったんだね」と言うとPESのホロウインドウから目を放し、胤の方へ振り向いてコーヒーを片手にPESから離れる。

「僕がいつも絞られてる、みたいな言い方はやめてくれないか」

「ところでインは剣と銃はどっちが扱い易いのかな？」

「剣だけど、それがどうしたんだ？ 何が言いたいのかわからない」

「私もそう思って、コレを創ってみたんだよ」

そう言つて胤に手渡して来たのは長さがおよそ三〇センチ程度の筒状をした漆黒のプラスチック、太さは三センチ程度。中間には分け目であろう直線や幾つかのスイッチ、と外観はこんな物だろう。

内部構造には両方共にわずか五ミリ程の長方形をした孔、それ以外には何も見当たらない。この用途の分らない代物は何だろうと思ひながら外装のスイッチを押す。すると漆黒の長さはおよそ七〇センチ、厚さもそれなりに薄いモノで幅は約二センチの細長い刀身状をしている光体が顕現する。

「刀身ほっそ……というか何だよこれ、こんなの創つてたなんて初耳だぞ」

「カテゴリー的には極細直長剣つてところかな、断じてレイピアじゃないよ、ショートソードもしくはロングソードの部類だから……そんで私がイン君専用に《Photo (P) Electron (E) Sensor (S) System (S)》を応用して創つた、インにでも扱えるPESなんだ。それに実はそれ、今までは実用段階じゃなかったんだ、何と言っても強度が足りなかったし持続時間と軽量化も出来なかった、だから余計な期待を持たせたらダメだと思って今まで話さなかったんだよ……全く、これ創るのに三年も掛かったよ。それでこの極細剣はその何れもの条件をクリアしたモジュールなんだ、しかもこれは双剣」

黒くてあまり光っているようには見えないのもあり、光体という感じがしない。それよりもどうやったらこの構造でこの形状に留めているのかすら理解が出来ない。しかも胤が刀身と思しき光体に触れると、物体化をしていて堅さもあることで更に驚いた。

本当にこの天災なる天才の少女は次元が違う、もはや宇宙人や未来人にすら思えてくる。お前は一体何者なんだ、と問い質したい気

持ちで一杯だ。

遠野柊は気にした風もなくコーヒーを一口飲んで、咽喉を潤すと言葉を続ける。

「ちなみにこれの名前は《ジェット・シルバー》——黒銀もしくは漆黒の銀が日本語訳ではして欲しい感じで、間違っても灰色や鉄色なんて言ったらダメ。相反するからこそその美しさがそこにあるのよ」
単にそれは色の名前で付けたただけだろ……（つややかな目）、と胤は思わなくもないが言葉にはしない。名前を付けるのというのは大概そういったものだろう。

遠野柊はコーヒーを飲み干すと説明を続ける。

「持続時間は一ヶ月は連続使用出来るから心配しなくて良いわよ。それと強度も申し分なしな域だと私は思う、だからと言ってまだ上がらない訳じゃないから、そんな時に言っ。じゃあモノは試し、シミュレーターを使ってみようか、こっちに來て」

言われるがまま胤は遠野博士に追隨すると拡張現実（AR）空間の部屋へ入る。

ここでは一人での模擬戦を体感的に味わうことが出来る。仮想現実（VR）空間とは違い、AR空間は体に疲労が出て来るし、発汗や息の乱れも当然ある。決してVRにもない訳ではないが、ゲーム等の場合は多少抑えられているのが常だ。

隣りに拵えられている小室から準備が出来たのか、アナウンスで遠野柊が「始めるわよ、痛覚判定は現実と同等だから気を付けて」と言い残し、遮断される。

『エリアミッションLv3の起動を確認、五秒後ミッションをスタートします。カウントダウン開始——三、二、一。ミッション・スタート』

機械的なアナウンスが終わり、胤の眼前には一人の剣士。どこかで見覚えのあるその剣士は、某有名なファンタジーアニメの主人公に似ていた。鋼鉄の鎧などに身を包まれた剣士は、胤が極細剣を両手に構えると見た目よりも速いスピードで襲い掛かってくる。相手

は身の丈程の大剣を持ったまま楽々とジャンプし、遠心力を付け上段から直線に振り下ろす。それを胤は両手の極細剣を交叉させて受け止める。

胤の全身に激痛という名の衝撃が奔る、何という重さだ。

数瞬、インパクト時の衝撃を何とか堪え、大剣を前方に弾き返してから後方へジャンプ。相手の出方を窺っていると、何かをボソツと呟きながら刀身を摩る。するとどうした訳か大剣が炎を纏っている、おいおい殺すきなのか、と思ってしまう。

すぐさま胤は通常の間人がギリギリ視認出来る速さで間合を詰め、左手の極細剣で大剣をブロックし、右手の方で心臓に突き刺してそのままの勢いで相手の脳天まで直線に斬り上げ振り抜く。多少の返り血が顔や服に降り掛かり、ミッション終了と同時に跡形もなく消え去る。未だに返り血を浴びた感触は残ったままで、顔や服にまだ返り血がこびり付いているんじゃないかと思ってしまう。でもこれは実践を重視した、胤がいつも指定している設定で、痛みを忘れない為のモノだ。

極細剣をしまつてA R空間が解除されるとそのまま部屋を出て遠野博士と合流する。遠野博士は愉快そうに鼻歌混じりでA R制御室から出てくるので、胤は若干の気後れを禁じ得ない。

「テストメントも無事終了……ということを使ってみた感想はどうか、イン」

「まあまああってとこかな。僕の愛用していた剣とほとんど同じだったし使いやすくはあったけど……やっぱり実物の方が良いな、重みが常を感じられる。僕の総合評価ではBってところが妥当かな。でも威力とかに関しては間違いなくSからSSS判定だと思うから、あまり生産しない方が良いと言うのが僕の感想」

「やれやれ、手厳しいねインは。どうせもうそのデータは私が持っている、メモリーにしかない。これ以上生産するつもりもないから後でそのデータをインに渡しておくよ、USBに転送してね」

「わかった、それよりそろそろ本題に入ってくれ、こんなことをさ

せる為だけに僕を呼んだんじゃないだろうせ」

「察しが良いね、実は能力判定をしたいんだ。前の計測から随分経っているだろう——《漆黒い妖精》。いや《不老不死の神子》のイン……それとも、それから派生した《時空神》^{タイム・アウト}と言うべきかな？」

胤は深い溜め息を吐き、顔を少し傾けて左手を当ててから腰に右手を添わせる。

「僕はそんな大層で中二病満載な設定はない、僕にだって弱点は人並みにあるし、死にもする。至って普通なんだ」

「あらま、認めたくはないと。それでも君は今、不老不死に近付きつつあるんだよね、残念ながら。それにこれは紛うこと無き事実で、以前の検査結果にもそう書いて立証されてるだよね。その体質を発見したのは六年くらい前からだけど、たぶんその体質は生まれ持ったものだと思うよ」

「そんだけ言うなら試してやろうじゃないか、それで何も無かったらお昼は奢れよな」

遠野柊は「私の勝ち揺るがないよ、諦めた方が良い……それに、そんなことならお安い御用。こんなやり方でなくとも万事OKなのにね」と言うと言を疎めて苦笑いをするが、胤には聞こえていない。CTS、DNA検査共に異状は視られなかったのだが、遠野柊はやっぱりか……と思う。専門分野という訳ではないのだが、多少のことは理解できる知識は持っている。

「おめでとう、これで晴れて君の不老不死という肩書は物的証拠で、またもや現れたよ。パーセンテージ的には約六〇%だよ、喜ばしいことだね」

「あー、やっぱり僕のこの体質は変わってくれないか……。やっぱりこの中二病満載な体質を認めるしかないのか、全くどうなってんだよ僕の体は。じゃあ今日はもう帰る」

「ああうん……じゃあちよっと待ってて、すぐに転送し終えるから。それとその剣はあげる、私はいらさないから」

遠野柊は剣のデータと充電器を持ってインが鎮座しているベット

へと向かい、そのまま胤にデータと充電器を渡す。

「じゃあまた今度」

「またいつでも遊びに来なよ、歓迎するから」

そういうと検査・モニタリング室からインは退室していく。

それを後目に見届けると、遠野椋はピーセックの置いてあるデスクの椅子へ座る。

「だけど忘れてはいけないよ、イン——まだ君は完全にそうなったわけじゃない、くれぐれも大怪我の重症には気を付けないと死ぬ可能性もなくはないからね……」と誰もいなくなった部屋で遠野椋は一人呟いていた。

胤が家路に就いたのはそれから数分後のことだ、家に帰っている途中に知らない男性が横たわっている。

最近噂されている麻薬密売とかなのだろうかと思ったのも束の間、女性の悲鳴が聞こえて来て、それに応じるかのように周りの道行く人達も相応の悲鳴や反応を見せる。野次馬は時が経つに連れて拡大していくだろう、今のうちに現場の撮影をしておこう、何かに繋がるかも知れない。

胤が駆け寄るとそこには女性の遺体（首から上がなくなっている）が歩道脇の手入れのされていない売家に投げ棄てられていて、遺体は全裸の上にシーツが被せられていたらしい。

すぐに遺体とその周辺を撮影をするとその場を少しばかり離れて、撮影したデバイスでピクチャを再生する。

女性の死因は見ての通りだと思いが、まずはこんな通行人の多いところで棄てる意味がわからない、デメリットが多すぎる。そしてどうやって殺害したかだが刃物に拠る物だと推測される、それなりに刃渡りのある刃物なら首を切断するのも容易いと言える。女性であろうと男性であろうと同じことが言えよう、しかも遺体の首元にはスパッと刃物で切れた痕があったと言うことは、それなりの勢いで斬り捨てたことになる。これは知人の犯行が高いだろう、部外者の線も消えたわけではないが。

そこまで思考すると一度辺りを見渡して不審人物がいなか探り、再び被害者に向き直る。まあどうであれ、この事件にはアレが関与しているのは薄そうだ。今にして思えばただの物好きが、自分の功績を見せびらかしたかったのかも知れないしなと思ひ直す。最初に悲鳴を上げた女性が通報してから少し、パトカーが現れようやく警察が来た。

警官の「この遺体の第一発見者は」とか「この遺体の身元は判明したか」などの言葉が飛び交う。それを横目にしながら胤は自転車に乗って再び家路に就く。

ボロボロになったビルディング、階層は三階まで設えられていて、敷地面積もさほど大きくない。そこには似つかわしくない少女達が屯（屯）していて、どうしてこんな所に、と思わざるを得ない。今では使われていない建物で前は貸し出しの事務所だったみたいだが、今やその面影はもうほとんど残っていない。

「ねえ、今日の候補者は誰だっけ？」

壊れたガラス窓の所に座っているどこかの制服調の服を着ている少女が尋ねる。

その少女の視線には数名の自分と同等か年端もいかない少女達が大部屋にはいる、最年少で十歳くらい。

この建物の住人は少女だけで構成されていて候補者も全員少女または女性で、少年や男性は誰一人として存在しない。

「今日の候補者は、六名です。リストはこの通り——」

そう言って出してきたのは、現在最年少の少女でサイズは小さいものだが同じ服装をしている少女がPESのホロウインドウで表示されたものだ。周りに屯している数名の少女達も同じ服装だ。

名前を見ても容姿を見ても少女にはどこの誰までは詳細を見ないとわからなかった。内容は中学一年が三人、高校一年が一人、小学五年が二人で知人は一人もない。少女は表示してくれた女の子に「ありがとう、もういいわ」と言うのと「了解です」と言っつてそのホロウインドウを閉じる。

不意に周囲を確認する。今日はメンバー全員がいるわね、と少女は思いながら外の風景を一瞥する。

「今日入学したばかりの中学生を三人も狙うなんてね……アナタはどう思うの雛備（ひなび）。」

「別に友達でもないですし、何とも思いませんよ。ただ、仲間が出来るのは嬉しいですね、みんな死んで逝っちゃいますし」

「いつも思うけど、壊れてるわねアナタ。あたしが言えた義理でもないことだけだ」

「そうですかね……えへへ。でも普通のことだと思えますよ？ 誰も知らない人には興味が気にならないものでしょう、それよりも存在すらわからないですよ、きっと同じですよ美黎さん^{みれい}」

「アナタ確実にあたしより頭のネジが外れてるわ、それだけはわかったから。それにあたしはさっき褒めたつもりじゃないんだけどね」すると雛備と呼ばれている、さっきホロウインドウを表示してくれた最年少の少女は笑顔を絶やさず「えー、そうですか？」と、無垢な表情で言うてくる。

本当に頭のネジが数本逝かれてると思うが、少女——美黎とてその限りではなかった。一步間違えれば雛備かもしれない以上にとうしようもなくなってしまう、それだけはなんとしても避けたいのだ、自分が自分で無くなってしまういそうだから。

候補者Ⅱテストメントが死ぬのは当たり前、運良く生き残ってもそこからが地獄。なまじ力が強い分制御が出来なくなったら、あっという間に自分の身体が壊れて死んでしまうという危険性がある。候補者は自分の中の爆弾を扱えなければならない、それがどれ程難しいのかを知っている、つまり美黎もテストメントだからだ。ここにいる人間は全てがテストメント、美黎達は必然的にある一定の領域まで達しなければならぬ、つまり死にたくないためならノルマをクリアしろと言うことだ。

「今の時点で壁を越えた人はいる？」

辺りはシーンとしている、美黎含め他のメンバー全員がまだ達してはいないようだ。どうにもやり切れない雰囲気がある、それは他のメンバーが逝かれているのと他のことに関心を持っていないからだ。美黎は立ち上がり扉の前で立ち止まると「そろそろ行わよ雛備、仲間を造りにね」と言って退室する。

「はーい、了解です」と屈託のない笑顔で雛備は言おうと、仲間を造るための機械——《Bellona(B) Factory(F)》

Interface (I)》を服のポケットへ粗雑に入れる、これはテストメント全員が所持している。かくゆう美黎もスカートのポケットに忍ばせている。横幅二センチで長さは六センチ弱の角張った無針注射器みたいな形状を成している、厚さは三センチ程度で重さもさほど感じない。

テストメントは単独行動は慎まなければいけない、それは力の暴走があるからだ。だからペアを組んで行動するのが厳守としてあるのだが、美黎のパートナーである雛備は方向音痴であり目を放した隙にいつも居なくなってしまう。別に放って置いてもいいのだが、殺人衝動をまだ上手く抑えられない雛備を一人にさせておくのは色々と面倒なことになる可能性が多分にあるので、おいそれと放って置くわけにもいかないのだ。

「雛備、アナタにはまだ武器携帯を許した憶えはないのだけど」

「いやでも、ほらアレですよ。抵抗してきた時とか、チンピラさんとか居たら恐いですね。だからいざと言う時の護身用ですよ、護身用お〜♪」

そう言いながらルンルン気分で今日持って行くこうとしてる武器の品定めを、雛備はしている。

「その護身用で昨日無防備の女性を一人携帯用の小型ナイフで殺してる、忘れたとは言わせないわよ。だから殺人衝動が抑えられるようにならないと、武器携帯は許可出来ないわ」

「そんなあゝ、酷いですよ美黎さんは武器を携帯しているのに……」

「あたしはアナタとは違って多少の分別は弁えてるから良いのよ。さ、そんなモノいらないから、さっさと行くわよ」

さっきまでルンルンの笑顔だった雛備の顔は、涙眼になって目頭に涙の粒を溜めている、まるでオモチャが買って貰えない幼児のようだ。そんなことはさておき、ズリズリと引き摺って雛備を部屋から出すと、ようやく観念して歩いてくれる雛備と共に美黎は候補者のもとへと向かう。

ビルディングの外へ出るとまずは大通りを目指して闊歩し、迷子

にならせない為の処置として雛備と手を繋ぐ。小学生と中学生、高校生や大学生などはまだ本格的に講義や授業が始まっていないので、午後には帰宅していると思われる。今は十一時二十分、これから帰りホームルームをしたりして学校から出てくる所ばかりだろうと思う。

「まずは小学生から行くわよ、雛備。子供は少々厄介だから気を付けてよ、間違っても殺さないで」

そんなに危ないんですか？ と疑問に思っているような顔を雛備はする。雛備はまだ知らないのだろう小学生が一番厄介なことを、と思つて美黎は横目で雛備を見やる。

美黎は前に何度か小学生の候補生を担当したことがあるが、そのどれもで美黎は悲惨な目に遭つた。まずは不審人物として疑われるのがしょっちゅうで、警戒されてまともに近づくことすらなかなか出来ない。まあ子供だから隙はいくらでもあるのだが、強引にことを運ぶと後々面倒なことになりかねないから避けておきたいのだ。それに関して今日は問題ないだろう、雛備がいるのだから。

そして何とか出来たとしても今度は興奮状態の力の暴走がある、これはどうしようもないことで、最初は必ずと言つて良いほど興奮状態に陥る。暴走した場合、何も知らない子供は焦つて際限なく力を解放してしまう、それを止める術は今のところないので見ていることしか出来ない。そうなるとどうなるか、身体のキャパシティを超えた力はただのエネルギーにしかならないことは明白だ。その力を扱い切れるはずもなく臨界点を超え、最悪の場合死に到らしめるのである。

その光景を傍から見たら無惨としか言いようが無いだろう、そこまで思考した所で美黎はこう口にする。

「いえ今回はそんなに難しくはならないと思うわ。雛備、今回はアナタがいるからね」

大通りに出て数分歩くと目的地——市立二伊野小学校はある、全校生徒は約七〇名ほどの学校ここら辺にしたら人数の多い学校だ。

来年度には舩渡小と庄賀茂小、二伊野小とで廃統合され一つの学校となる予定だ。

「二伊野小学校……ここね。じゃあ雛備、頼んだわよ」

「アイアイサー！ ……ったい、何するんですか美黎さん」

「ふざけない、ちゃんとしないとアナタのご飯は今日無いわよ」

「りよ、了解であります隊長——っ」

雛備はそう言うときにも誰もいないグラウンド目掛けて走っていく。

いつもながらに明る子供である、ただ心配なのはくだらないネタをどこで仕入れてきているのかだ。場が和むのは悪いとは言わないが多少の緊張感が欲しいのだ、雛備を見ていて美黎はつくづくそう思うようになった。

あ、と気付いたときにはもう遅かった。

雛備はセキュリティーのセンサーに引っ掛かってしまっていたのである。警報が嵐のように鳴り響く。すぐさま警報機を携帯していた拳銃で打ち抜き、雛備を連れて学校から離れる。

「何してるの、雛備。セキュリティーに引っ掛かって……」

「普通に入っちゃダメだったの？」

「当たり前でしょ、セキュリティーがあるんだから。こうなったら正攻法じゃ無理ね、仲間を呼ぶしかないわ」

ピーセッドを起動させてアドレス帳を開く、仲間の一人にタッチして電話を掛ける。

呼び出し音が三回鳴ったところで通話が始まった。

『何かな、今忙しいんだけど』

「大至急頼みたいことがあるの、雛備がバカやっちゃってね。セキュリティーに姿を捉えられたから、大至急セキュリティーをハックして改竄して欲しいのよ」

『二人とも姿は人に見られてないの？ 見られてたらバレない保障は出来ないよ』

「誰にも見られてはいないとは思うけどね、念のためお願い」
『やれやれ、まあ大体わかったからこっちは任せてもらうから戻っ

て良いよ。念のため二十分は待機してて、それからなら入っても良いから』そう言うのとプツリと通話が切れる。

ここで二十分のタイムロス、早くしないと生徒たちが帰ってしまふ。

ともあれ今は一安心だ、一回でも姿が露顕してしまえば動きづらくなる、それを跡対処してくれる仲間がいるからだ。

「軽率な行動は慎みなさいよ」

そう言って美黎はため息を吐く、雛備とパートナーになってからというもの確実に叱っている回数が増えている、これは軽視出来ない事実だ。ことさら今になってパートナーを解消することも難しい。「そんなことを言われなくても、私にはどうすることも出来なかったり……あ、出てきたみたいですよ生徒たち」

小学校のグラウンドの方を見ると「そうね、これからどうしようかしら。まあ、後を付けるしかないけどね」と美黎は呟くと雛備のセミロング桃緋色な髪に手を添わせ、少し撫でる。そろそろ行くか、と思い直して撫でるのを途中で止め、候補者に向かって歩き始めた。

有栖家の食卓は日替わりの当番制だ、今何が言いたいのかということ、昼飯が無いということだ。今日は弟の大河が食卓の当番なのだ、さぼりやがったなと思いながらも口には出さない。他にも洗濯物や家の掃除などはほぼ大河が一人で行っている。

とある事情で胤と大河は今、二人暮らしをしている。

食卓の当番のほとんどが胤なのだが、大河が言うには「少しは調理しないと腕が鈍っちゃうからやらせて」とのことだったので別段、断る理由も無く今に至っている。本来ならば弟の頑張りを見て「料理くらいお前がやらなくてもいいぞ、僕が全部するから」と言っても良さそうな所だろう。

今は午後一時が終わろうかという頃だ、当然大河も今日の学校は午前中に済んでいるはずで、どんなに遅くてもこの時間に食事が出来ていないのはありえないのだが——どうしたことだろう、そんな

異常事態が今発生しているではないか。焦ること無かれ、まだ遊びに行っているとかあるだろう、なんで真っ先に出てくるのが誘拐や殺害なんだ……おかしいだろ。

その時だ、玄関の扉が開き閉じられる。

玄関の方からは「あー、やっぱりもう兄さん帰って来てるや」と声が聞こえる。そこでようやく大河が帰ってきたことを把握した。ダイニングキッチンに大河の姿が見えると、胤は嫌さず「今までどこ行ってたんだ？」と大河に投げかける。

「え、買出しだよ、食材が無かったし……」

「あっそ、それなら良いんだ。僕は部屋にいるから出来たら呼んでくれな」

大河に手を軽く振って胤は部屋へ向かう。

部屋の扉を開けて部屋を見るとあまりに物が無いことに気付く。

そんなことは今まであまり気にしたことは無かったのだが、と言うよりこの部屋に――この家にあまり居た記憶が無い。と言うのも僕はずっと裏で動いていたし、帰るのも通過点にしかなくていなかったで留まったことがない。それに対して大河はずっとここいるので私物はそれなりに有るだろう。

「家宝の宝刀をこんなにまじまじ見るのはいつ振りなんだろう……もしかしたら五年前だったかもな。継承式もまだ済んでいないこの宝刀、僕には継ぐ資格がないな」

胤は《双対番》^{そうたいばんがひ}の片割れと《初極終》^{ういきよくつい}を見て少なからず思うものがある。双対番の片割れの刀を探しても何故見つからなかったのか、本来ならば番なのだから一緒にあって当然なはずなのだが……という疑問もあるが今にして思えば、そんなことは些細なことだ。

何もかもがいやになってくる、今の一番の希望は大河が何も知らずに成長していることだ。こんなときには身体を動かした方が良くと聞くので、胤は机の横にある収納スペースにしまっけて置いたAR空間制御とVR感知制御のインターフェイス機器を取り出す。

そしてダイニングキッチンへ行き、大河に「大広間にはこれから

三時間が入ってくるなよ」と伝えて部屋に戻り、すぐさまAR空間制御とVR感知制御のインターフェイス機器を持って何もない大広間へ行く。まずARの空間制御インターフェイスを起動させ、後にVR感知制御のインターフェイスを起動させる。

VRのインターフェイスを頭に被せ、インターフェイス同士を無線連結させて音声認識を確認した上で、設定を音声入力いく。

『システムオールグリーン、AR空間展開します。続いてVR処理を開始、武器とターゲットはVRになります。感覚判定の増減はなし、難易度アブノーマルからアンノウン―ミッシヨンステージLV4〜6、ベローナ・ストーム三時間コース。開始まで三秒……』
相当に惨いミッシヨン内容を聞き終え、インは瞼を閉じて開始を待つ。

開始を知らせるアラーム音、それと同時に瞼を開きまずは敵を確認する。どうやらライフル使いと拳銃使い、中世ヨーロッパ風味あふれる剣士。剣士の得物はレイピアかならば、と思い双対番の片割れと改造済みの拳銃を想像して自分の手元に呼び出す。拳銃は腰のホルスターに一旦しまい込んで、今度は初極終を手元に呼び出す。初極終は双対番とは違い刀身の横幅と厚さが少しばかりある。

無数の銃弾が目の前に飛び込んでくる、剣士はまだ動く気配がない。

左右の刀を巧みに操り胤に向かってくる銃弾を弾き飛ばしたり返したり、ぶった切ったりする。胤はこの動作を何事もないかのように平然とやってのける。ターゲットが拳銃のリロードをしている間に胤は前進する、ここでようやく剣士が動いた。レイピアの柄を持って鞘から刀身を振り抜き、剣士はインの前に立ちはだかる。

胤は何も動じず初極終を剣士とのほぼ中間地点になるように投げつけ、刀身の三分の一が減り込む。それを踏み台にしてジャンプして降下しながら剣士を頭上から斬り落として、同時に左手で拳銃をホルスターから引き抜く。

途中剣士の「ブハッ!」と吐血音が聞こえてくるが、今は悲鳴な

どは完全に無視だ。

ターゲットのリロードが終わり銃口を向けてくるのを見計らい、その拳銃を三・九口径の仮想実弾で弾く。するとライフルの四・五口径の弾丸が頬を擦めていき、胤はバックステップして初極終を地面から引き抜くと、拳銃の銃弾とライフルの銃弾の弾幕が飛来してくる。

その全ての銃弾を掻い潜りながら、拳銃の方にターゲットを絞り接近する。

今度は双対番の方をライフル男の方へ向けて投げつけ、人間がギリギリ目視出来ないスピードで背後に回り、その勢いで心臓に突き刺しそのまま斬り捨てる。

現時点でオーバーアクションと呼ばれるものは存在しない、ここまでのことがあったという間のことで、ライフル男は立ち尽くしている（ように見える）。

そのままスピードで近づき下段斬り上げをお見舞いすると、血飛沫が服や素肌に付く。自分の姿を確認するとそこには自分の血――返り血、返り血、返り血のオンパレードで酷い姿になっている。刀も血抜きが出来てない所は固まり始めているが、まだまだ使えそう。踵を返し地面に突き刺さっている刀身が黒い刀剣を引き抜くと、刀を交互に振って血を振り飛ばす。

すると次に現れたのは全員が剣士、総人数は四人ばかりでさっきよりも簡単そうだ、と思い胤は少し安堵する。

およそ二時間四十分後、胤はラストスパートに入っていた。

最終バトルで約一万人弱の仮想兵を斬り殺し、約一万人の仮想兵を撃ち殺した。胤にも多大のダメージが残っているが、ターゲットは残りわずか……だと思う。一度に出現するターゲットは十人、残っているのはたった六人――これくらいならまだやれる。

全力で六人を瞬殺すると、ミッションクリアの文字とともにボーンステージのお誘い。

「ここまで来たんだし……やってみるか」

胤は軽い気持ちでYESと音声入力。

するとどうしたとか、部屋の半分くらいのスペースを占拠するほどの緋氷のドラゴンが顕現する。空想の産物が今ここに存在するのだ、これがただのデータに過ぎないということは分かりきっているが、本当に倒せるのかこれは……と思わずにはいられない。

「いや、データで存在する限り倒せる存在だと信じよう」

ドラゴンの緋い細氷あかのブレスが胤を襲う、暖色なのに寒いというギャップ（いわゆる共感覚という奴だろう）が衣服を楽々に透し、身体にまで響く。冷たいや痛いなどを通り越し、もはや感覚が無くなってくる。

ドラゴンのブレスはゆうに二分近くにまで及び、胤の戦意は随分と削がれていた。

胤は壁を跳躍しドラゴンの背中に飛び乗って両手に握っている刀を同時に上段へ振り上げ、思いつ切り振り下ろし、多少ゴツゴツした氷で出来ているドラゴンの背中を叩く切る。

———次の瞬間。

胤の振り下ろした刀は無惨に折れ粉々になった後、手元の柄と共に消失する。刀より堅い強固な皮膚、叩き切ったはずの所には数ミリの傷しか見て取れない。やはり完全氷結な氷のごとく堅いドラゴンの皮膚は考えうる限り一つしか出て来ない、それは貰ったばかりの黒い極細剣だ。

胤はすぐに頭の中で想像し、ジェット・シルバーを手元へ呼び出す。中央をスライドさせて二つに分け、光電子の刀身をポップアップさせて刀身を突き刺そうとするとドラゴンが尻尾を器用に使って胤を弾き落とす。ドラゴンは口を大きく開けると目の前にはエネルギーの塊が出来始めている、力を再度振り絞って発射直前のエネルギーの塊に片一方の剣を突き刺し誘爆させ、その勢いで開いている口を初めとしてドラゴンの身体を真っ二つにする。

身体への疲労感は絶大だが、胤は何とかまだ動けるみたいだ。

ドラゴンは遺体は消え、服や素肌に付着している血も何事もなか

ったかのように消え去る。するとすぐあとに効果音が鳴り響き、ポ
ーナスミッション並びにベローナ・ストームクリアの文字が表示さ
れたのち、A R空間の解除が始まる。

「やっと、終わった……」

胤は被っていたV Rのインターフェイスを取り外し、電源をシャ
ットアウトする。達成感と疲労感がフィードバックしてきて眠気が
押し寄せてきた胤は、A Rの方も電源を切り終わるとそのまま突っ
伏したまま一休みする。

この手は黒ずんだ真つ赤な血で汚れている、それは仮想や拡張世
界限ってのことだけではない。殺した人の血によって手や身体、心
までもが汚染され闇の一端に引き摺り込まれる。胤の汚れ切った身
体は光には戻れない暗闇。いま胤が光射している場所にいられるの
は、まだ組織には胤に利用価値が残っているからだろうと思う、で
なければ対立している相手をわざわざ生かしておくはずがない。

そこまで考えた所でいや待てよ、と胤は思い直す。今回の依頼に
あるのは電子ドラックによるものだ、組織が関与している可能性は
十分にあるが確証はない。知らないところでいらぬ思考を働かせる
のはただの時間朗詠をしているだけに過ぎない、今回は関与してい
るかどうかもわからないのだ、無意味な詮索は止しておこう……た
だそうなった時の下準備はしとしても良いだろう。

「……兄さん、入るよ。うわっ……」

大河は汗だけで制服（汗でびっしょり濡れている）のまま倒れこ
んでいる胤を呆気に取りられて凝視していて、数瞬の間が室内に蔓延
る。大河はどうしてくれようこの兄さん、と思うのだが何事もない
ように済ませ「早く兄さんは、風呂に入って着替えてきて」と冷静
に言うことしか出来なかった。

「物音がしなくなったと思ったらこれだもんなあ……全く何考えて
んだか」

「良いだろべつに何でもよ。それとそれはここに置いといて、あと
で取りに来るし」

「それはわかったけど、とにかく服脱いで洗濯機の中に入れてきて」
ウチは制服の場合洗濯機と乾燥機が違っているので、少しばかり手間が掛かるのだ。だがしかし悲観することばかりではない、その一つには皺取機能やらその他機能が満載なのだ、因みに製作者は遠野栞であり洗濯機も以下同文なので異様なまでに高性能なのだ。

洗面台・洗濯機・乾燥機がある脱衣所で服を脱ぎ、生まれたままの姿になる。タオルを持って入ると、タオル掛けの取っ手にタオルを掛けて防水加工や何やを施されているデイスプレーにタッチ。本来ならばPESで無線連結してシャワーなどを使用するのだが、故あって胤には使用できないので、もともとこのデイスプレーには湯と水の残高などを表示するだけだったものをデイスプレーでも操作可能なようにしたのだ。

シャワーのノズルを固定するストッパーの高い位置に固定して、お湯の勢いを強にしてお湯を噴出させる。ベトベトになった体をシャワーの温水の雨が洗い流してくれる。洗剤を使って体を全て洗い終わるとタオルで体全体を拭き風呂場を出ると、そのままタオルを洗濯機に投げ込む。

下着を着用してからドライヤーで髪の毛を乾かす。髪の毛を半分も乾かし切っていない所でドライヤーがブスン、という何とも言えない効果音を立てて動かなくなり、この時本気でドライエアーを風呂場に導入しようと思った。何にしても今は考えるだけ無駄なので、仕方なく新たに取り出したタオルを髪の毛に乗せて拭きながら脱衣所を出る。

部屋に戻り服を着替えると大広間へ行って、ARとVR機器を回収するとまた自室へ戻る。少しして大河が「兄さん、ご飯出来たよ」と言うのでダイニングルームへと行く。

胤が椅子に座ると野菜炒めと鶏豚牛丼、肉じゃがと炒飯を目の前のダイニングテーブルに、大河が出てくる。

「大河、ちょっとこの量多すぎないか？」

「兄さんがお昼に食べなかったのが悪いんだから、ちゃんと食べて

よ」

「だからって一気に食べるのは……」

「問題ないよ、兄さんはハードワーカーなんだから。メタボリックになる心配はない——というよりそれぐらい食べないと襲れると思うけど？」

「あの大河。僕は肥りたい訳でも襲れたい訳でも、ましてやマツチヨになりたい訳でもないんだ。今ぐらいで丁度良いんだ、わかるだろ……お前も剣術やってるなら。無駄な筋肉なら付けない方が良い」

胤はそう言うともまずは肉じゃがと野菜炒めを一口、その次に炒飯を四分の一くらい食べ肉じゃがを一気に掻き込むと、大河が置いていたコップのお茶を飲む。炒飯の残りを四分の一に減らし、肉たっぷりの丼を二口ほど咀嚼。野菜炒めも半分に近づいた頃には炒飯は無くなり、肉がたっぷりあった丼も残すところもう少しだ。フードファイターになった気分になるのは否めなかったが、それでも料理は全部体内へ詰め込んだ。

「べつに食べないとも言っていないから……」

胤はそう言うともつぽ向き、流し台に食器を置いて水を溜めると、ダイニングルームを出て自室へ戻る。その光景を大河は呆然と見ていることしか出来なくて、正気に戻って食事を済ますことに専念するのは胤が居なくなってからだった。

部屋へ戻った胤が最初にしたのは食休みがてらに旧世代ノートPCを起動させ、USBメモリーを接続することだった。旧式とは言っても製作者は遠野椋なので、PES形式の物まで扱える（一部コンテンツは不可）頼もしい機種だ。

マウスを操作してUSBメモリーをクリックし《ピーザPEBデータ》という圧縮フォルダだけが表示され、そのクリックすると幾つかのファイルが表示される。構造が簡単に記されていてイメージ画像があるもの、その技術や構造について事細かに詳細を記してあるもの、その他開発時のデータなどが含まれている。さすがは天才というべ

きか、胤には理解出来ない所が少なからずある。電子機器を自作したり違法なアプリを製作したり、クラッキングの常習犯な胤でもわからないのだ。

「そういえば三〇センチもあるから持ち運びがちょっときついな、枕にでも二つに分けてもらうか、それぐらいはしてくれるだろ」

胤はそうぼやいてノートPCをシャットダウンさせて開いたディスプレイを閉じる。するとタイミングを見計らったようにディスプレイの着信音が奏でられ、液晶画面を確認すると今回も例の通り秘匿回線だ。

やれやれ仕方ない、と思うが出ないわけにもいかなないので、胤は通話ボタンをタッチしてデバイスを耳に当てる。

「依頼の続報が入った、今すぐ本社へ来い。これからのことも決めたい」

「わかった、すぐ行く」

胤は通話を閉じるとデバイスを手カートの右側ポケットへ戻し、拳銃を腰のホルスターへ収め、PEBを二つに分けてから左側ポケットへ入れる。外へ出て自転車に乗るとイクシル本社へと向かう。

今は春だというのに夜は外気はまだ少しだけ冬の肌寒さが残っている。長袖の黒銀ジャケットを羽織っているだけまだましというものだ、羽織っていなかったら黒のTシャツ（無地）だけでいた所だ。胤は基本黒の配色で服をコーディネートしていて、それは死者への想いを忘れないためである。遠野柊や白鴉が悪乗りで明るい服をプレゼントしてくるので何着かは所持しているが、実際にそれを着たのは数えるほどしかない。

言われるがままイクシルの本社へ来た胤は、裏口エントランスホールから入り受付で「社長は今ミーティングルームに居ますので、そちらまで来るようにとのことです」と受付嬢が告げる。

受付を済ませたインがミーティングルームへ行くと、そこにはPESで生成された巨大なホロウインドウが展開されていて、その傍らには白鴉と何故か遠野柊までいる。

「あ、遅いようイン君。イン君なら三分で来れるでしょ」

「じゃあ早速だが始めるか。キハナ、まずは牧野智和の遺体を出してくれ」

「りょーかいーっ」

ホロウインドウに表示されたのは、今日の帰りがけに見た女性の遺体だった。

胤はなぜこの写真がここで出てくるのかが少し予想外だった。と言うことはこの事件の犯人は電子ドラックの使用者なのか、それならそれで合点はいくというものだ。

「イン、君はこの現場に居たはずだね。そこに不審人物は居なかったか、男性でも女性でもどっちでも良い」

「いや、あの場所には不審な人物が居たようには見えなかったな……現場に居なかったとなると、人が騒いでいるのを楽しむ奴じゃないってことくらいだけど」

「俺のあくまで想像上でもその反応が正常だな、それに想像通りなら殺した犯人はなんとも思っていないだろうしな。それにここ数日間の行方不明の子供も増えてるというデータがある、犯人は十中八九電子ドラックの使用者だ」

「それは早計過ぎるんじゃないか白鴉、仮に犯人がドラッグワーカーだとしてもだ、物証が何もない上に確証もないだろう、僕は焦り過ぎだと思うぞ。僕も僕なりに動いてはみるが、期待はしないでくれ」

「そうだなこじ付けが過ぎた、インは引き続きドラッグワーカーの搜索の方を頼む、これから海外なんでこの件には関われないからな。仕事を貰って来ただけ有難いと思えよ、本来ならこれはインに任せたいものでお前がすることだからな。まあ好きにすると良い、俺も俺で動いてみるさ、後はキハナに任せた」

白鴉は同じ年だと思えないほどの言葉を言って、ミーティングルームから去っていった。

すると遠野はPESをシャットダウンすると胤に向き直り微笑む、

まるで腹黒い不健康な天使のようだ。天使とフォローを入れてみたけど、さすがの天使にも腹黒いのと不健康が重なるとフォローし切れなかったみたいだ。

「と言うわけで後を任されてしまったけど、私は何したら良いの？」
「まずは今は使われていない町があっただろ、そこに監視カメラの設置とこの地域に出来るだけ広範囲に監視カメラを設置して隈なく包囲することかな。それともしものときのために、これのフォルムチェンジを要求する」

そう言ってインはジェット・シルバーを遠野栂に手渡す。

「それってつまり、この地域全体を監視カメラで監視しろってことだよ、それはたぶん経費的に無理かな……だってこの奴はイクシル内部にはあってもイクシルには無いから、経費は今の所インの所持金くらいしか予算が無いんだ、ははは。まあジェット・シルバーのフォルムチェンジくらいなら余裕で出来るけどね」

「はやくも雲行きが怪しくなってきたな……」

「それでフォルムチェンジはどういう感じにするの？」

「剣を一振りずつに分けて欲しい、三〇センチは長すぎる。それに柄の部分は一五センチのままで良いから。それと新たに刃渡りが短い物を二本頼む、出来るか？」

「君は私を誰だと思っている、そんなことは朝飯前さ。とは言っても今からだと深夜三時くらいまで掛かるからここに泊まってきなよ。私のオフィスなら空いてるし、寝るところには困らない、それにどうせ私はオフィスに戻らないし」

遠野栂は有無を言わず決めてしまい地下二階の研究室に籠もってしまった、仕方なく胤は同じ階にある遠野栂の個室オフィスへ行って仮眠用のベッドに寝転がり睡眠を取る。

翌朝、睡眠から目が覚めて最初に見たものがデジタルクロックだった。

現在の時刻を鮮明に刻んでいる——只今の時刻は午前五時四十分なり、胤はホッと一安心して毛布を除けてベッドから降り、電灯の

点いてないオフィスから退室する。

そのまま研究室へ行くと遠野椛の姿は見当たらない、どこへ行ったのだろうか、と思いつつ奥まで進んでいくと一人の遺体が発見された。死因は不健康な生活からなる過労死と言ったところだろうか、目に見えてカロリーが足りてないことが窺える。

「おいしっかりしろ、今ここには僕と君しか居ないんだぞ、遠野。それにパートナー不在になったらこの揉め事処理の会社は潰れるぞ」何度か身体を激しく揺ると遠野椛の意識が戻ってきた。

遠野椛は立ち上がると幾度かよろめきながら奥のデスクの方へ行き、デスクの上にあるPEBを手に取り、前と同じ筒状の物と長方形の物を二つずつ山形に胤へ投げてくる。

「じゃあイン君、テストメントをしに行ってらっしゃい……もう私はダメみたい。また何かあったら起こしてね、じゃあおやすみ」そう言つて軽く手を振ると遠野椛は深い眠りに落ちた。

おいおい、と思いながら胤は床に寝ている遠野椛を椅子へ座らせ、デスクに寝かせる。

「おつかれさん。テストメントをしろと言われても、もう帰らないと今日の弁当が作れなくなるからなあ、それに朝飯もだ。さつさと帰って仕度しないとな」

胤は研究室を出ると何時ものように裏口のエントランスホールから駐車場の脇の方へ向かい、自転車に乗って自宅までの帰路を辿る。気付けば太陽も昇り始めているが、さすがにまだ少し薄暗く電灯の灯りもまだちらほら点いていた。

帰宅すると朝飯と並行して弁当を作っていく、ここで活躍するのが日々の生活を担う冷凍食品の数々である。ハンバーグとコロッケをメインにして野菜を適量添え、白飯をおかずの隣りにある広大なスペース一杯に入れる。

分量にして肉類やコロッケは二、サラダは三、それ以外は全て白飯だ。小学校は給食というものが存在するので、弁当はいらないから楽だ。朝飯は和風テイストで味噌汁（朝餉）とご飯だけという質

素だけど文句の出しようの無いメニューだ。

面倒なときにこれを朝昼夕したら、さすがに大河に怒られた。商品朝餉・昼餉・夕餉に変えたのにも関わらずだ、まあ気持ちからはわからなくも無いが。

「次は風呂だな、時間もあるし」

現在の時間は六時半ばで、出るまでには一時間ちよいもある。

胤はシャワーでサーツと流すとタオルで身体を満遍なく拭き、タオルを洗濯機へ突っ込み、制服に身を包むと頭に掛けたタオルで髪を拭きながら乾かす。タオルを首に掛けて自室へ戻り教科書やノートをダウンロードしておいたデイバイスを学校指定のケースに入れ、拳銃を腰のホルスターに収め、私用のデイバイスとPEB（四本全部）を制服のポケットに入れる。

タオルを手に取りまだ湿った髪の毛をタオルで拭き取ると、ケースを持って脱衣所へ行って洗濯機にタオルを放り込むと、朝食を食べるにダイニングへと向かう。

そのときはさすがに大河も起きてきていて朝食を食べていた。胤は朝食を流し込むように食べると、流し台で食器や箸を軽く水洗いして洗浄機器へと入れて洗剤を加えるとスタートのボタンをタッチする。

「今日は余裕を持って出られそうだな、大河も早く仕度して学校に行けよ」

「兄さんには言われたくないね、その台詞」

大河は冷ややかな表情で言葉を胤に浴びせ、テレビを眺めている。弁当箱をケースにしまうと、胤は拳を強く握り出来るだけ笑顔で大河に問う。

「それはどおゆうことかな、大河君!？」

「そのままの意味だけど気にしないで、兄さんに勝てる人はいないから」

この冷徹さは誰に似たのだろうか、と胤は思考を廻らせると両親しか思い当たらない。ただ両親と違うのは胤を嫌っている訳ではな

いことだ。現在は七時四十分少々、胤は大河より先に自転車に乗り学校へ向かう。

夏希達三人が教室へ着いたのが授業が近かったこともあって、授業用ノートのデイベイスで『遅刻するかと思ったー』とか『ぎりぎりセーフ!』とか電子メールを送ってくるのでどうしたものか、と胤は考えながら受信したメールの文面を眺める。

考えてもどうにも無らなかつたので『まあギリギリ一時限目には間に合って良かったよ』と送って、胤はぎこちない笑顔を三人へ向ける。

またメールが受信されて来て送り主は来瀬夏希と表示され、内容にはリンクが貼られていて?ここへ来て?と添えられていた。リンクを介すると、どこかのホームページへ辿り着いた、どうやら掲示板ようだ。

取り敢えず胤は適当に『ここで良いのか?』と書き込む。

すると数秒後に自動的に更新され、次のコメントが表示される。

ナツキ――『そう言えばさ、部活の内容考えてきた?』

イン――『なんとなくの候補はある……だけど気乗りはしない』

ミュ――『試しにどんなのか言ってみたら?』

ヨル――『そう……だね、ちゃんと買った方が良いと思う、よ?』

イン――『でもさ、はつきり言って何でも出来る部活で良いんじゃないか? ここでこれって決めるんじゃないくてさ』

ミュ――『それ一理あるかも(笑)』

ナツキ――『うゝ、それもそうですわね。でもそうしたら部活動を創る意味が無くなってしまふ様な気が……』

ヨル――『……それは言ってますね』

イン――『この際だから言っておくけど、別に部活動に拘らなくても良いんじゃないか?』

ナツキ&ミュ&ヨル――『………(冷ややかな視線)』

ミュ――『ま、インの言う通りかなあ。どうしてもやりたいわけでも無いしね、それにもう友達だしね』

何て会話を胤と夏希達は一時間目が終わるまで続けていた。

そこでわかったことはこのホームページが夏希の自作だったというくらいだ、いや別にそれはそれでどうでも良かったのだが。まあ収獲は下手に部活動に入らなくて良くなったってことくらいだろうか。

溜息を交じりにデバイスの電源を切り、胤は少しの間ポーズとする。

次の時間は体育——身体測定なのでインは更衣室へ行き割り当てられた体操服を着用する。更衣室から出てグラウンドへ向かうと、白線の引かれているレーンなどがある。レーンは五〇メートルの物から一〇〇メートルの物まで様々だ。

「ねえ、知ってる？ 今話題になってる連続失踪事件の噂」

「えー、何それ。神隠しってオチじゃないわよね？」

「それが違うの、ネットに転がってたヤツなんだけど、鬼秘神が殺したんだって。そのHPサイトがヒメアリングって名前なんだよ」

「それってただの酔狂じゃないの？ もしくは対象を攪乱させるためとか」

現実味の欠けた友人の発言にげんなりするが、隣で一〇〇メートル走の順番待ちしている。

「オカルト好きも大概に留めときなさいよ、アンタ」

「でもでも、私これは信憑性かなりあると思うんだよねー。だってさ、何かこう……ビビッと来たんだもん」

「じゃあその、オニヒメガミ……だっけ？ それは何なのよ」

眼鏡を掛けた少女は吃り^{ども}気味に問うてくると、順番が二つ前へ進む。

すると隣にいる少女は自慢気な態度でふふーん、と鼻で笑うような効果音を口に出し「それはね……」と勿体振ったような言い方をする。

「鬼秘神は人間にして人に非ず、人を喰う者なりや、汝に対するは

侵された女性なり。鬼を裡に秘めし者は人を喰らい、快感と狂鬼性を強めてゆく……だったかな、長くて憶えてないや」

「そんなの絶対に嘘だから真に受けない方が良いわよ」

「えー、良いじゃん。全くもう夢がないなあ……シビア過ぎるよ、この現実主義者めっ!」

「私にだって夢はあるわよ、それと別にシビアではないと思うわよ」
そう言うと言鏡を掛けている短髪の少女は立ち上がって、走るために白線の前まで歩く。すると「あ、待ってよ」と慌てて言いながら、肩のラインより少し伸びていて少々ウェーブの掛かっている頭髮の少女は眼鏡の少女を追いかける。

お昼休みを報せるチャイムが鳴り少し経った頃、胤は四人で食べることになって、もう諦めの域にまで達している。机を合わせて弁当を広げる、ということはこの場合出来ないのです、速やかにダイニングルームへ行く。

食事はこのダイニングルームで食べることが義務的に課せられている。

胤達は適当に空いている席へ腰を掛け座る。

「でさでさ、女装と男装を当てるコーナーがあって、これがまた難しいんだよね」

「そうなの？ 私は見てないからわからないわね」

「僕も見えてないな、特にバラエティー番組を見ようとは思わないし」

「えー、これは見えて損は無い番組だよ、二人とも」

そう言う足枷自由は学食の呼び出しが流れ、学食を受け取りに行く。

——と、その時だ、胤の隣の方から気になる話し声が聞こえて来る。

「このヒメアリングって掲示板、相当やばいよ。通報した方が良い。鬼秘神？ そんなの世迷言よ、これは殺人集団の掲示板だわ」

「そうかなあ……私は想像だけで実際にはやってないと思うけど?」

「私もアンタから聞いたときはそう思ってたわよ。でもこれを見てたら、もしもってことが有り得ると思えてくるわ」

「えー、そうかなあ」と眼鏡を掛けている少女に言いながら、その少女は暢気に片手でポリポリと頭を掻く。

胤は鬼秘神やヒメアリングと聞こえた時点で、デバイスで検索に掛けていた。

検索結果の最初に目的のサイトだろうリンクが表示される。

リンクにタッチしてサイトへ飛ぶと、でかでかと『HIMELING』の文字が現れ、その下にはホームページの内容が簡素に短く記されていた。

チャットが盛んに行われていて、日記には食事時には濃い内容が綴られているし、写真や動画も同様だ。その中でも一際目立っているのは動画だろうと思うが、とにかくホームページ全体の内容が政府に喧嘩を売っている様な内容なのだ。

「これは確かに……本当だとするならばっとけないレベルだな」

冒頭が既に無能な政府共に告ぐ、なんて煽り文句だからだ、と言っても実際政府はこんな物には取り合わないだろうが。通報したとして国が動くわけが無いことは明白だ。それに、胤が前に所属していたあの機関が動くとも思えない。

胤は弁当に手を付けながらチャットのレスを読んでいく。

「何のことですか？」

そう言いながら高梁夜宵がディスプレイを覗き込もうとして来るので、胤は急いでデバイスをスリープモードにして、スカートのポケットへしまう。

「いや、何でも……こっちの話」

「お待たせー、って……みんな待っていてくれてない。特に、イン君に関してはもう食べ終わりそうだし」

追求されかねない雰囲気をもった切るように、足枷自由が学食を持って戻ってくる。

胤は助かった、と思いつつ最後の唐揚げ達を咀嚼する。

「それはゴメン。あと僕はちょっと用が出来たから早退するよ」
唐揚げを食べ終わると弁当箱を片付けて教室へ行き、鞆を持って
学校を後にする。

まず胤はイクシルの本社へ向かい、遠野椛の所へ行く。
ラボへ入ると遠野椛は不健康そうな身体を駆使して作業をしてい
る。

「イン君、君は中学校に通う気は無いのかな？」
悪戯っぽい笑みで遠野椛が言ってくる。

「そんなことより、今はこっちが先だ。気になるサイトを見つけた、
まだ関係が有るとは言えないが、良い線は行くだろうと僕は踏んで
いる」

「へえ……そんなに有力なの？」

「連続失踪事件、通り魔事件、データの奪取。これらが同一の事件
だと少し考えただけでわかる。連続失踪はデータ奪取で奪われた情
報を基にして、作ったモノを投与させたことに因る物で、通り魔事
件はその副作用とも言える殺人衝動が起こした物だ」

カタカタというNPCとPESのキーボードの打鍵音が音を立て
るだけだ。

「今回もそれ程難しい方じゃない、ただ突き出すだけだ」

「漆黒い妖精さんの手に負えない仕事をあたし達が出来るとは思え
ないけどね」

「遠野……久しぶりに聞いたぞ、その呼び名」

「本当の意味で君に一番近い表現だと思ってね、イン君のは不老不
死と言っても不老がメインであって、不死はその副産物みたいな物
だから」

そう言う物かね、と思いつつ胤は素早く画面をスクロールし、チ
ャットや日記の内容を読破していく。チャットのコメントは殆どが
事後報告的なものばかりで場所の特定は難しく、根城となる場所の
情報は皆無だった。

溜息を吐く胤に遠野椋はダメだったのか、と思い苦笑いをする。

「で、監視カメラの方はどうなってるんだ？」

「昨日の今日だよ、出来てるわけ無いだろう。最低でもあと二時間は掛かる、イン君なら自分の足で捜した方が断然早いよ」

「まあ、そうだよな……もともと監視カメラは保険的な役割にしか思っ
てない。でも念の為に設置し終えるまでは動かないで待機して
るとするか」

「それじゃあさ、こっちを手伝ってよ」

遠野椋がニヤつきながら手招きをして言ってくる。そこには電子
機器であろう物がいくつか置いてあり、そのテストをしろとのこと
だろう。

溜息を吐くのを押し留めると、呆れ顔になって「わかった」と胤
は素っ気無く対応する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1288z/>

ロスト・セーブ

2011年12月25日17時48分発行